



Management System News

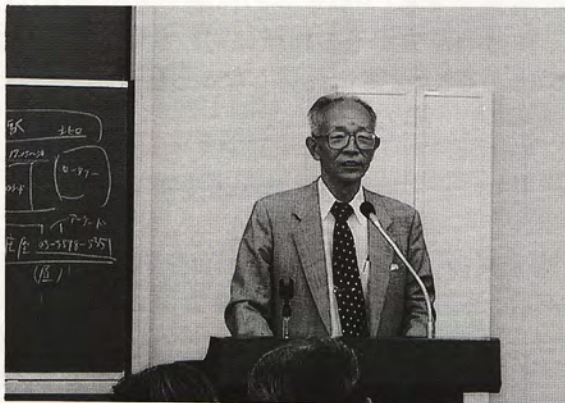
INTERNATIONAL QA INSTITUTE

国際品質保証協会 機関誌

巻頭に寄せて

会長 三浦 昭夫

ASQ CQA/CQE/CRE/CQMgr/CQA-HCCP



ISO-MS 研究会 2001 年度第 2 回合同研究会
(9月8日東京北区赤羽会館での三浦会長)

内之浦からのロケットが無事軌道に乗り、また、イチロー、新庄等が大リーグで連日の大活躍という明るい話題のかたわら、本号の編集集中に外務省での不祥事がまた露見、そこへ9月11日のアメリカでの同時多発テロによる大惨事、大変な世界になったものである。

我々の仕事の方では、近ごろ各方面から、わが国の ISO 審査員及び関連諸機関の質の問題で認証制度の威信失墜などと益々言われ出してきたおり、その予防処置とそれ以前の是正処置を急いで講じなければならない。ある団体に特別対策組織を結成したので、少しでもお役に立てればと思って参考資料を二三点提供し、助言もしているが、先ずは足元からと考え、当会に関係の ISO-MS 研究会の大会で、9月8日 ISO 2000 年版移行と監査規格 ISO 19011 への対応方法について講演を行った。その概要は、本号4~5ページの運営幹事による記事のとおりである。講演でも言ったことであるが、何事も基本が大切、基本から外れていたら、進めば進むほど目標から遠ざかるというものである。最近の日本がおかしいのは、基本と常識の欠如であろう。私は過去に不肖の弟子ながら、剣道と拳法では日本最高峰の大先生方多数に長年薫陶を受け、いつも「基本に立ち返れ」と言われていた。これを高段者も含めて大方が、初歩の基本動作の繰り返し練習だと信じ込んでいるのだが、古来の武術でのこの教えは、結局一挙一動についての基本に対する PDCA のことだと、今になってはたと思い当たった。稽古でも試合でも、「都度基本に照らして反省し、修正を加えて練磨を重ねて行け」ということである。イチローの好打好守備も、基本に対して PDCA を繰り返している成果である。日本を立て直すには、先ずは有志から努力して正しい基本を身に付け、それに対する PDCA の練磨を心がけてもらわねばならない。

目次

巻頭に寄せて	1
審査員の資質を考える	2
ASQ CQE 合格体験記	3
ISO-MS 研究会	4-5
2001 年度第 2 回合同研究会報告	
新旧の狭間で想うこと	6
IQAI 入会に際して	7
事務局から	8
編集後記	8



国際品質保証協会は、QA に関連する活動を通して日本の繁栄に奉仕・貢献することを目的として 1991 年に設立された任意団体で、米国品質学会日本支部や IATCA 賛助団体として国際的にも活動している。ISO9000/14000 他、各種規格に対する体制整備、監査員養成講習及び認証取得、PL・安全対策等、依頼先の期待と要求に合わせたコンサルティングなども行っている。

審査員の資質を考える

会員 渡部 長幸

はじめに

ISO 規格に基づく審査登録は、大企業から中小企業へと裾野を拡大し、当然であるが審査員を増員するところとなっている。数の帳尻はなんとか合っているが、内容は大いに不安である。大企業のリストラの振り向け先として、審査機関をターゲットに大量に投入されている。必ずしも適格者ばかりではない。マネジメントの経験や品質管理の知識、ISO 規格に基づくシステムの構築・受審・監査の経験が豊富とは言えない。かなり促成栽培の審査員が審査を行っている。顧客である企業は審査の質を求めており、ISO 審査登録制度そのものをも問われかねない今、審査員はどうあるべきかを考察してみた。

受審、コンサルタント、審査員を経験して

筆者は、ISO 規格適合のシステムの構築・受審、顧客や供給者等へのコンサルタント、そして審査員として角度の異なる活動を行ってきた。極論で一面的見方であるが、受審者は審査員の前で、蛇に狙われた蛙であり、コンサルタントに対しては、まな板の鯉で口も手も差しはさめない状態である。審査員は、報酬を得ている以上プロとしての責任と能力を要求される。しかし企業側が受身では、費用対効果を考えると、決して ISO 規格の認証登録は有効とはならない。

岡目八目と企業文化の理解

審査員は、第三者としての位置付けで、顧客や各種関係先になり代わって企業のマネジメントシステムを、ISO 規格に準じて審査する。システムの中で仕事をしている人達はどうしても客観的な物見が難しい。傍観者の方が、大所高所から物が見える。囲碁で言う岡目八目の出来る立場にある審査員は、その優位さを存分に発揮したいところである。

筆者が審査員として、数多くの企業を訪問して審査をしていて気が付いたことは、社風や企業が持っている特徴といったものが、百社あれば百様あるということである。産業分野が違えば勿論であるが、同業種であってもこれほどまで違うのかということを知ることが知らされた。所在地・組織の規模・仕事のやり方・用

語等、常識とされることが異なるのである。企業文化を理解することは極めて難しい。同じ仕事でも企業ごとにシステムが異なり、何がベストというものではない。その企業・組織に適したものを運用すべきものであろう。最適であるか否か、より良いシステムがあるか、社会的背景や時代にふさわしいものであるかについて議論することになる。審査員は、経営コンサルタントではなく、分をわかまえて話し合うべきである。企業への余計なおせっかいは禁物である。審査員は、ISO の規格に戻って、それに沿ったものであるか、逸脱がないかを確認することが本来の作業である。大切なことは、自分の見方がその組織に対して間違っている可能性もあることを常に認識しながら審査をすることが必要なのだと思う。

継続的改善への支援

審査員は、審査の現場で適合性の判断を行うわけであるから、審査の質は一に審査員の資質に多くを依存することになる。審査員がシステムを的確に認識するために審査員として要求されている重要なことは次のようなことではなかろうか。

- 1) 企業文化を理解する: マニュアルは勿論、会社案内のパンフレットなど事前調査をしっかりと行った上で企業訪問する
- 2) 組織の特徴に合った規格の解釈・適用を考える
- 3) 審査はサンプリングであることを念頭に: 点とか線といった部分を見ていることを認識し、部分を全体像から捉えること
- 4) 審査員が一方向的に話している時は、審査をしているとは言えない: 相手に多くを話してもらい、話を引き出す姿勢をもつこと(自分が話をする方を好む人は不適格と言える)
- 5) 社会情勢の変化、経済的視野を磨く: 費用対効果を念頭に適切なバランス感覚で企業を見る
- 6) 審査を通して、企業に役立つマネジメントシステムにブラッシュアップする支援の精神を忘れない: Create Together で臨むこと

まとめ

審査の質は、審査員の資質により決まる。審査登録制度において、審査員は、最も重大な役割と責任を担っている。真剣勝負と心得て、常に人間性を磨き、慢心することなく、最高の心身状態で企業に役立つ審査が出来るよう、自制心を働かせて審査に臨むことが大切である。審査の出来栄を評価するのは、言うまでもなく審査員でなく受審者である。

ASQ CQE 合格体験記

◆いきなり CQE に挑戦した無謀な私◆

会員 森永浩太郎(CQE#40306)

マツダ(株)技術サービス部

2000年6月にASQ CQE試験に合格した。東京での受験を可能にくださったIQAI三浦会長とASQ Certification Div.に、まずはこの場を借り感謝申し上げたい。'97年と'98年は広島からデトロイトに飛び受験していたものが、時差のない東京で受験できることは大きな追い風だった。CQEのみならずCQA、CSQC、CRE、CQMといった国際的に認知されつつある知識・能力認定試験を本邦で受験できることは、昨今のグローバルなビジネス環境に合致したものと考ええる。本稿では、より多くの日本人が私と違い、効率的に合格されるよう具体的な勉強法を紹介したい。



試験合格の要件は3つと考える。①CQE Body of Knowledge(出題領域)に沿った専門知識、②英語知覚能力、③体力。①への対策は、“CQE Primer(参考書)”と“Solution Text(問題集)”を中心に組み合わせること。当然、英語なので概念のわかりにくいものは日本語の参考書(後述)を活用する。ちなみに、当初私は左様な参考書を知らず、“Juran's Quality Control Handbook”とデトロイトで受講したASQ Refresher Courseの手作り資料で挑戦。2度失敗した。②については、たとえTOEIC860点あろうとも専門用語の語彙と米国英語の表現がわからないと試験で苦勞する。勉強期間では問題集の問題と回答を自分の言葉(邦文)でノートし、何を尋ねているのか確実にとらえる作業をしていた。問題集はFD版がある。操作が軽快で量がこなせるうえ、英語の瞬間認識力が向上した。試験現場には電子辞書を持ち込んだ。③CQE試験は5時間で160問の解答を要するので、途中必ず集中力が落ちる時間がやってくる。ビタミンCの錠剤や甘めの飲料を用意し、昼食は軽めにしておこう。

取り組みの方向として次の3つを推奨したい。1)まずCQAから挑戦し、次にCQEに取り組む。CQEは、CQA、CREに比べ出題領域が浅く広く、準備計画が絞りにくい。IQAI会員で他のCQE合格者をもみても、みな、ステップアップ戦略をとっていた。実はこの方が効率的と言える。2)問題集に精力的に取り組む。教科書の理解に拘泥しない。問題集に取り組むことによって何をどれだけ理解できたか測ることができるうえ、英語力が向上し、一石二鳥。3)早朝に勉強する。社会人である以上、仕事との調整は骨がおれる。強いて早く切り上げ早めに就寝する。週末に時間をとって勉強するより、集中力がある分、理解が早いようだ。

次に、出題範囲ごとの戦術。1)確率・統計:問題集につける。不明点は「統計のはなし(大村、日科技連)」、「統計・確率のはなし(郡山/和泉澤、日本実業出版'98)」、「高等学校 確率・統計(旺文社)」で確認した。2)実験計画法:「実験計画法入門(鷲尾、規格協会'95)」で十分。3)信頼性工学:弊社の研修テキスト「信頼性データの解析入門(マツダ品質保証部'97)」を利用。4)抜取検査:MIL-STD-105を活用。5)人材管理:Primerでも充分ながら副読本として「経営管理(野中、日経文庫'83)」を活用。

ASQの試験にこれから挑戦される方は、1度や2度の不合格であきらめないでほしい。不合格の際には通知書に自分の得点、領域別の合格者平均と自分の正答率等が示されるので、次の学習計画が立てやすい。また、あくまで知識・能力試験なので、語学同様、コツコツ積み重ねればどうにかなるようだ。

そもそも私は現在の会社に入社以来、'91年まで顧客サービスという品質保証活動の末端といえる業務に従事してきたが、そこでは信頼性工学の応用はあるものの、SPCや品質監査とは異なる世界であった。そのあと、'91-'96年まで米国でフォード社サプライヤーという立場で品質保証業務に従事した。帰国の予定になった頃、せっかく身に付けたスキルの証を得たい欲求からCQE獲得に挑戦し始めた。ASQの中からCQEを選んだのは業務との関連が多かったからである。現地の短大に通い、ASQ Refresher Courseを受けたが、実に刺激的であった。最初の授業が“Quality Cost”であったことは忘れられない。Juranの概念に感動し、是非CQEを取りたいと決意を固めたのであった。受講料\$300で36時間の授業を受け、\$90の“Quality Handbook”と\$20の用語集を与えられたのも満足度が高かった。しかし、同コースだけで受験した最初の試験はさんざんで、見込みの甘さに舌をかみながら帰国し紆余曲折が始まった。読者各位には私の要領の悪さを参考にして頂ければ何よりである。

**ISO-MS 研究会
2001 年度第 2 回合同研究会報告**

理事 松本好生

(ISO-MS 研究会第 4 分科会幹事)

去る9月8日、東京都北区の赤羽会館において、ISO-MS 研究会の2001年度第2回合同研究会が開催された。その開催準備・運営を担当した第4分科会を代表して、その概要をここに報告する。

今回の大会には研究会正会員ほか、一般からの参加者も含め50名余が集まり、盛況のうちに無事終了することができた。

第一部(10:00~17:00)では、講演と各分科会の活動を、第2部では懇親会の2部構成で行われているが、ここでは紙面の都合上、第1部の講演の概要を報告することとして、他は割愛させていただく。

今回の講演は、ISO-MS 研究会会長でIQAI会長でもある三浦昭夫先生に「日本の審査の現状と課題」(副題としてISO2k 及びISO19011も考えて)をテーマに、ISO9001:2000 改訂や改訂作業中の監査に係る指針の規格であるISO19011も踏まえ、日本における審査の現状について時宜を得た講演をいただいた。以下にその内容を報告する。

ISO/DIS19011 と審査の現状

ISO19011 は現在 ISO10011 と ISO14010-14012 を統合した改訂規格(Guideline)としての改訂作業が行われている。規格の内容は大きく変わったのかといえば、規格の構成が Part1-3 から Section5-7 に変更、記述もやさしい英語で、少し丁寧になり、分かりやすくなった。改訂規格の内容で大きな問題といえば、審査員/監査員の資格認定のところであろう。これは現在の DIS 段階から FDIS 段階へ移行する間に内容が変更されることが予想される。問題は、規格は監査の対象範囲として第3者監査だけでなく第2者監査や内部監査までも含んではいるものの、DISの内容は外部審査員の内容に偏重していることである。この文書を使うに当たっては指針であることを踏まえて、規定内容が概ね適用できればよしとして扱えばよい。

ISO9001、ISO14001、QS9000、AS9000、TL9000、HACCPに係るそれぞれの監査は、皆監査としては同じである。「監査」とは規格に合っているか、こうやれと決めたとおりにやっているか、更に内部監査ではそのやり方で自社に本当に役に立っているかを調べるこ

である。すべての監査に19011は同じように適用できる。特殊な業界での監査は違うとの見方があるが、監査の基本は同じであり、固有技術のどこに気を付けるかが違っているだけであって、枝葉が一寸変わっているとして大騒ぎする日本の現状の方がおかしいのである。9001に劣らず14001においても日本の環境ISOの現状はといえば、紙くずの番、電気を消して節電する、トリクロロエチレン等による地下水汚染などなど、全くなっていない。登録件数ばかり多いだけで本来の目的を達成していない。ここで、三浦先生からは9年前の「標準化と品質管理」(日本規格協会:1992.6)の記事ではあるが、基本さえしっかり捉えておけば19011も怖くないとして、監査の基本として「品質マニュアル作成のポイント」(第6回:最終回掲載記事:-監査、QAの効果的実践-)が改めて紹介された。

ISO9001:2000 の要注意点

ISO9001:2000 の要注意点としては、次の事項が挙げられる。

- Process Approach
- Improvement
- Customer Satisfaction
- Monitoring
- Management Leadership

はじめの3点はムダなことをたくさんやる方向に走るか、今まで考えたことがなくて何をどうすればいいかわからないケースで終わっていることが多いが、これらは自分の会社の仕事は何であるかを会社がわきまえていれば楽に対応できるものである。“ISO規格のために認証を維持している”ところは“振り回され型”の会社であり、新卒の規格になるとその対応で大騒ぎしなければならない羽目になる。



まず、「Process Approach」では、InputをOutputに転換する場合のThroughput(通過量、処理量)にも留意すべきである。重要な点はProcess managementとProcess affectors[5M+E](Man, Machine, Method, Material, Measurement, +Environment)である。

また、「Monitoring」については、経過を追いか

ける、又は状況観察の意味であって JIS 訳の「監視」は適切な訳ではない。例えば VTR などのモニターボタン、これはうまく録画しているかどうかを随時見られるようにするための機能であることを考えれば分かるであろう。

次に、「Management Leadership」、ここが規格の“Highlight”である。しかし実態はといえば上の方にいる人がウワの空であること、これは日本では品質が現場のことだと思いついていて、規格が“品質”をあまり強調しすぎていることに起因していると言えよう。

一般に理解されていないこと

審査における最も重要な文書となる「マニュアル」とは何かを多くの人々が理解していない。ISO 規格適合の認証を通すためのもの、あるいは ISO 規格の順番どおりでないマニュアルではないなどという誤解もある。マニュアルとは「やり方」を書いた便覧、手引書である。(やるべきことの記述ではなく、便利のためのやり方の記述である。)品質マニュアルの原点は、50 年前のアメリカ軍の品質保証制度において Quality Assurance Program Manual と呼ばれていたもので、これは会社の管理全般を記述した「業務管理規範」というべきものである。従って、会社の管理のために便利な手引きになっていなければ無意味である。多くの人々が「品質管理」とは枝葉のことをガリガリやること、検査の番や作業者の集会の延長と認識してしまっている。品質管理の本来の目的はムダな仕事をいかにしないようにするかである。誤解はまだある。以下に挙げてみよう。

-「Quality Planning」、これは品質計画書と称するものを作ることだと思っている。

-「校正」と「検査」は何のためにやるか、これも理解されていない。これをやれば品質が良くなる、また ISO 規格認証のためにやるものだと思っている。

-「識別」、「保存」、「予防処置」も ISO 規格適合のためにやるものと思っている。

-「実証確認」と「validation」、製薬や医療機械の分野では従来から「実証確認」を行っていたにもかかわらず、規格で「validation」がでてきたら全く別物と思いき、同じことを二重にやっている実態さえある。

-「統計学的手法」、94 年版の JIS では統計的手法と訳しているが、これも審査員に言われるまま棒グラフを書く手順書を作った事例もある。これが果たして統計学的手法か？

-「抜取検査」の意味・目的 もわかっていない。現実にあった話として手順書に「抜取りは5個とする」とあった。それでは 100 個で 5 個抜き取る、1,000,000 個

でも 5 個抜き取る、3 個のときは？？？

-「顧客満足」もとんだ見当違いが多い項目のようである。

-「是正処置」、「予防処置」、「改善」の違いは？ 駄目なものを直すことが「是正」、いいものではあるがもっと良くするために行うことが「改善」である。是正の種はそう会社にあっては困るもの、種がなくなれば無理に ISO 規格適合審査のためにやる必要もない。要は、何を何のためにやるかを明確にすることである。

マスメディアに見る日本の現実

今年の 8 月 7 日の「週刊朝日」に載った「最近の日本人の劣化の徹底考察」と題した記事のキーワードは、「知力低下」、「欲望肥大」、「自信喪失」、「倫理崩壊」、「拝金万能」等々、また、昨年 11 月の「朝日新聞」の記事では「日本の技術屋のオツムは小学生以下」とあった。2・3 年前のあるセミナーで当時の通産省の藤田課長の話によれば、「国際性欠如」、「英語力、英検 1 級ぐらい取れ」とあった。故小渕首相に至っては、「日本語すら駄目」、これが最も深刻であろう。

日本の審査における今後の課題

さて日本における審査の現状を踏まえて今後に残した課題についての話をしよう。ここに掲げたことは世間一般に言われている問題がありそうな、あるいは関係がありそうな事項である。それは、審査員の質、審査登録機関、研修機関、認定機関(JAB)、審査員評価登録機関(JRCA、IRCA)、受審企業側、自称コンサルタント、新聞社・出版社などに関することである。これらが原因であるとか一々批判してどうすべきかを論じるのが目的ではない。これらの問題に対し、いかにして我々会員、参加者自身が汚染されないようにし、日本をリードして行くかが大切なことである。「審査員の質」では、倫理、知識、規格の解釈の問題は大いに何とかしなければならぬ事項、これに加えて是正指摘をお土産に持ってこないと不満な審査団体もあるそうである。多数の「審査登録機関」では、予備審査を強要している、相手を指導している、業界専門の審査登録機関を作り、また指摘がないと満足しない、などなど。「認定機関(JAB)」の問題でも然り、特に「その業界に専門性のある審査員の起用の要求」、これは審査の要点をきちんと押さえている人を起用することで対応すべきである。以下にまとめてみると、

「審査登録機関」に求められることは、

1. 独立性
2. 利益相反行為(両天秤)をしない

(8ページへつづく)

新旧の狭間で想うこと

石野 茂

JIA-QA センター総務部長
ISO-MS研究会 幹事



最近、近所の若い娘さんと話す機会があり、話題が夏休みの旅行となったところで、彼女曰く、「私、彼とハワイに行くの！」当然オジンの習性として、「その彼とは近々結婚するの？」ときくと、「いやだー、おじさん(やはりオジンと見ている)古いー」。「ご両親は知っているの？」とまたオジンらしい質問が続き、「そんなの当然知ってるよ」と平然たるものでした。幸いというか不幸というか、私には娘がいないのでこのような状況に至っている親の気持ちはよく分かりませんが、もし、私の娘であれば、将来どのような関係になるか判らない、つまり不幸にする可能性を持つ男と旅行に行くことを認める訳はないと思うのであります。たぶんこの娘さんの親も認めているわけではなく彼女の勝手な解釈で OK と決め込んでいるようでした。このような身近な例を見るにつけ、「親の心子知らず」とは使い古された言葉のようであるが、永遠不滅の親子の心情を端的にあらわした表現と再認識であります。世の中の風潮として、婚前旅行などあたりまえの感覚、この感性に合わない人間は「古いー」と蔑まれるこの世の中こそおかしいのではないのでしょうか。

ISO9001 の 2000 年版が発行され、巷ではこの改訂に便乗した商売が賑やかに宣伝されている。2000 年版になって 1994 年版の心(親の心)は変わったのだろうか。若干の追加の要求事項はあるが本質的(親の心)などところは変わっていないと思うのは私だけだろうか。既に ISO9000 の審査登録を受けている企業には品質マネジメントシステムが厳然と存在し機能しているはずである。そのような企業に対し審査機関、審査員、コンサルタントは 2000 年版へのアップグレード(システムの質が向上する意味ではない)の際にどのように対応していくのだろうか、心配です。

ISO ブームのはしりの頃、1993 年に JIA-QA センターを立ち上げ審査登録業務を開始。当時はまだ認定機関の JAB もなく、どのように審査・登録するのか、どんな審査マニュアルが良いのかなど全て手探り状態でした。それに先立し、1991 年末に IRCA の主任審査員資格を取れるセミナーをアメリカから三浦昭夫先生が持ってこられ、最初の受講生として参加した関係

から先生とのお付き合いが始まりました。セミナーでの試験に合格後、審査経験を積むため先生のコンサルティング先へ「遠足」と称して私を含む未熟者の集団がさもエキスパートのような顔をしてお邪魔しました。今から思うと乱暴な話ですが、この遠足では事前にマニュアルが渡されることはなく、当日約 1 時間のレビュータイムが許され、その間にシステムの概要を掴まねばなりません。先生のマニュアルの大きな特徴、読みやすいが ISO 規格の要求事項との対比が難しい(ただし、目次に要求事項番号との対照表はある)が、我々未熟者に理解の時間を要しました。しかしながら、この経験は短時間で審査対象を理解しなければならぬ実際の審査に大いに役立ちました。

先生指導のマニュアルは、本来、企業が有すべきマネジメントシステムの姿を具現化したもので、現在の大部分のマニュアルがそうであるように、ISO 規格の要求基準と同じ並びで記載したものは別次元のものと言えます。使用サイドにたったマニュアルを求めれば先生の方式に到達するのは必然と思われませんが、実際は日本企業のほとんどが、審査機関や顧客を意識するあまり、目的をはずれ要求基準並びのスタイルの採用となっているのが現状です。しかし、2000 年版が発行され、この様相が変わってくるのでは、との気配が感じられます。というのは、ISO 規格の方の基準の並び方が変わって先生のマニュアルのスタイルに近づいたからです。こうなると、私の心配が顔をもたげてきます。2000 年版対応と称して、「今あるシステムを変更せよ」などと言う審査機関、審査員、コンサルタントが多数出てくるのではないかと。またぞろ要求基準の並びどおりのシステムを要求する。この愚を繰り返すのではないかと。要求基準が追加された部分だけ修正すればよいのであって、全面見直しする必要などさらさらないと考えます。

「1994 年版のシステムなんて古いー」などと蔑まれる世の中にはしたくないものです。1994 年版(親の心)を大切にしたい 2000 年版の世の中を期待したいものです。決して親の心を蔑ろにする者が横行する世の中にならぬよう IQAI 及び ISO-MS 研究会の皆様には頑張ってくださいたいものです。

IQAI 入会に際して

会員 瀧川 信敬

いきさつ

この度、入会させていただくことになりました瀧川です。

8月5日に開かれたIQAI総会に、三浦先生より「出てみないか」とのお誘いをいただき、どんなことをやっているのか興味もあったので出席させていただきました。というのは、7月14日に開かれたMS研究会の幹事会で、IQAIとMS研究会との統合が話題になったからである。それまでIQAIは、先生の私的な組織でごく限られた人たちが活動している団体という認識しかなかった。従って、極くまれにいただく会報で、活動の一部を垣間見る程度の関係しかなかったため、突然の統合話にも全くついていけない状態であった。従って、先生からお誘いをいただいたとき、MS研究会の一員としてIQAIのことを知らなければ、研究会の運営話にも付いていけないと感じたこともあり、出席させていただくことになった。

感想

IQAIに対し、以上のような無知な状態になってしまった原因を考えてみると、MS研究会の第3分科会は、担当する私も幹事の宮崎さんもIQAIには関係がなかったため情報が入らず、分科会の雑談にもIQAIの活動が話題にあがらなかったのではないかと思います。総会の議題から、IQAIの活動状況が解ってきたが、会則にもある、「国際的管理手法に関連する活動を通して広く社会の繁栄に奉仕・貢献する」活動を進めてはいるが、会員の国際会議出席費用となると金銭的にもかなり厳しい状況に置かれているようである。

提案

ISO規格に基づく審査登録のスキームは当然のことながらグローバルなものである。最近、JABに対して「審査機関の実施している予備審査はコンサルではないか」という苦情が寄せられ、JABの中でも話題になっているようである。この問題はJAB設立の時点でも問題になり、RvAにヨーロッパの実状を問うたところ、当時のヨーロッパでは審査機関が予備審査を実施することは許されていると聞き、ISO先進国がそのように

判断して運営しているならば、グローバルなスキームとして考え方を合わせざるを得ないと判断したことを思い出す。このようにISO規格に基づく認証スキームの世界に住んでいる者は、否が応でも国際的な動きや国際的な判断基準に関心を持たざるを得ない。

このように考えてくると、MS研究会の会員も含めて、国際的な動向は非常に興味のあるものであろうと推測できる。そこで、この誌面を借りていくつか提案を試みたい。

第1の提案は、もっと会費収入の増加を図るべきではないか。すなわち、もっと会員を増やすべきではないかということである。

少数精鋭の良いところも確かにあり、腐ったミカンのそばにあるミカンは腐るという事実もあるとは思いますが、私の経験で会社に入ってくる女子社員がどのように育つかを見てみると、きちんとした先輩(姉御)が居る部署の新入社員は立派に育つが、悪い先輩の牛耳っている職場に配属された新入社員はどうしようもない社員に育ってしまうという現実を見てきた。すなわち、中心になる先輩(指導者層)がきちんとしていれば、側に来た新入会員も腐らなくて済むと考える。

収入を増やし、国際的に力を発揮するために、国際会議に機関として人員を派遣して貢献し、その情報を会員にも還元することを行えば、会員も満足するのではなかろうか。

第2の提案は、もっと外部に対してアピールする方法を工夫すべきではないか。

現在、機関誌は会員が費用を負担して配布しているようであるが、機関誌の定期購読者を積極的に募集するとか、MS研究会の会員全員に有償で配布するか、さもなければMS研究会の会費の中に機関誌代を含んだ会費にして全員に配布するなど、もっと多くの方々に読んでもらって初めて機関誌の目的も達せられるのではないか。また、総会の折にホームページを持っていることも知ったが、いただいた機関誌を見てもアドレスは表示されていない。広く社会に貢献する為に更にこれを活用し、もっともっとアピールしないといけないのではなかろうか。

新入会員が、たった1回の総会に出ただけの情報で勝手な提案を行った。的を得ていないところもあると思うが、議論のきっかけにでもなれば幸いである。



(8ページより)

3. 八百長、インチキをしない

「審査員」などにはさらに次の事項が必要であろう。

- 4. 機密保持
- 5. 著作権の盗用をしない
- 6. 賄賂を貰わない

今回の講演の締めくくりとして、講師の三浦先生からは、上に掲げた審査員をはじめ、審査登録機関、認定機関、審査員評価登録機関、コンサルタントに関連する重要なキーワードとして、独立性、利益相反行為、八百長、賄賂、機密保持、著作権盗用、知識、常識、実力、規格の理解、国語力、外国語理解力、国際性がマトリックスで示された。ここでは紙面の関係で詳細の説明は割愛するが、読者におかれてはどの項目がそれぞれ該当するか、該当しないのかについてよく考え、励行していただければ幸いである。



◆◆◆ 事務局から ◆◆◆

【ASQ資格試験】

ASQの公認資格試験で、今年6月に小田宗隆会員が日本で9人目のCQA(公認監査士)に合格しました。他の公認資格は、CQE 4人、CRE 2人、CSQE 2人、CQManager 1人、HACCP CQA 4人となっています。今回の試験は12月1日(土)に、CQA、CQE、CSQEを東京で実施します。お申込みは、米国品質学会宛に直接お送りください。(締切り:10月5日)

【2001年度ASQ年次大会】

ノースカロライナ州 Charlotteにおいて2001.5.6から2001.5.9に行われたASQ年次大会に、当会より三浦会長と近藤事務局長が出席しました。

【ISO-MS研究会行事】

東京舞浜の第一ホテル東京ベイにおいて2001.12.7にISO-MS研究会の年次大会が行われます。会員でない

一般の方々の参加も歓迎しています。非会員で参加をご希望の方は、事務局にお問い合わせください。

【IATCA年次大会】

IATCAの年次大会が、11月12～16日にローマで開催されますが、テロ事件の影響を考慮し、当会からは今年はお出見送りの予定。

【総会の開催】

当会の2001年度の定例総会が2001.8.5に行われ、MS-研究会幹事会で決定された新たなWG「国際活動部会」の発足と、今後に向けた研究会との合併が審議されました。(事務局 近藤信也)

編集後記

当会の活動に関連して、文化、習慣、発想のクセ、シキタリの違いを考慮すべきということが会員の間でもよく話題になるのですが、その感を今回の記事でさらに強くしました。

「審査員の資質を考える」では企業文化の理解の重要性を、「新旧の狭間で想うこと」では我国に多くある習性、即ち、本質的なところ(心)よりも外見に捕われる、自主より対応に価値を置くといった傾向を指摘しています。

「ASQ CQE 合格体験記」では、アメリカでは印象的でレベルの高い講座が低価格で開講されていることの実態を紹介し、また、「IQAI入会に際しては」では、判定者と助言者・指導者との関係という古くて新しい問題を考慮・判断することが、我国の文化の中では難しいことを示唆しているようです。

ISO規格ほかの認証制度に初期から関わりあっておられる方々、米国で品質関連業務を数年間経験された気鋭の方の記事並びにISO-MS研究会合同研究会での会長の講演は、ブームに近いISO規格に基づく認証制度に翻弄されないために、原点に戻るのと同時に文化の観点でも、種々考え直してみる良い機会を与えてくれたのではないかと思います。

(石原隆昌)

本 部：〒745-0072 徳山市弥生町2丁目1番地
西原技術事務所 気付
Tel：0834-21-0177 Fax：0834-21-0716

東京支部：〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-24-14-703
(有)国際品質システム 三浦昭夫 気付
Tel：03-3712-6776 Fax：03-3712-3399

事務局：Fax：0965-386-5056; E-mail：s-kondo@bigfoot.com 機関誌発行回数/頒価：年2回/年間1000円